

池崎 忠孝 著 『概説石田三成』批評集

諸家より「概説石田三成」に寄せられた数百通の讀後感想の書信のうちより一部分を無斷借用摘録いたしました。御諒恕を乞ふ。(順序不同)

法學博士 田 均氏
代議士 芦 村

拜呈 近業石田三成悉く落掌、早速披見仕り候。成程と感心致し無條件にて快著と結論仕り候。それにしても君の八面六臂は驚いたもの也。軍事評論家等と一括しては申譯無し、愈々筆硯の健ならむ事を祈り候。(下略)

文學博士 中 村 直 勝氏
京大教授

(前略) 御著「石田三成」早速拜見、趣味的なる御記述全く一氣に讀了仕候、三成の人物については日頃憧憬仕居候事とて嬉しく拜讀仕候。

歌 人 川 田 順氏

拜啓 御近業「概説石田三成」は實に愉快、一氣に讀了いたし候。今更ながら大兄の史眼と行文とに敬

服仕候。(下略)

文部次官 菊池 豊三 郎氏

(前略) 御惠贈の尊著石田三成飛付くやうにして一氣呵成に通讀興味殊更深甚に覚え申候。小生中學時代同宿の先輩にて早稲田大學にて政治學を専攻せる猛生あり、常に談論風發、特に福本日南氏の史論に傾倒し政治及歴史の諸問題に一隻眼を有し其感化により戰國時代の政情及人物の批判に於て徳川時代の政治的背景の爲に歪曲せられたる史觀に慍らず、従つて史論が石田三成に酷なるを痛憤致居候と共に萬斛の同情禁じ難きもの有之候。たゞ一抹の靄のかゝれるが如き感じあるは後世の爲遺憾に存居候ひし處、今回尊臺の好著に接し、三成が當時の愚昧奸佞の徒輩に傑出する一個俊傑にして非凡の才幹を有する誠意一貫の士たることを縦横に批判論證せられ、人物の眞骨頂を摘出して面目躍如たらしめられたるは誠に痛快に堪へず胸のすく思ひ致候。是れ決して小生一己の感懐に止まらざることと存候。(下略)

文部省専門
學務局長 永 井 浩氏

(前略) 石田三成に就ては洵に興味深く拜見いたしました。讀んで大いに共鳴致しましたが、改つて批評などする知識もありませんし、その柄でもございません。貴著に依ると三成は立派な武將であつたと同時に、此の上なく行届いた行政官であつたやうです。戰時下の文官として、外交に財政に其の他諸々の行

政に、行くとして可ならざるなき才智と手腕を示し乍ら、其の識見が周圍に比し餘りに卓絶せるが故に、そして恐らくは何人に對しても是非の判決を率直且徹底的に斷じ過ぎたが爲に、群雄の怨みを買ひ大事の瀬戸際に志を遂げ得なかつたことは、今考へても残念なことに思はれます。誰がつくつたものか、私の好きな唄に「天下分目の軍さに敗れ、歸る山路のほとゝぎす」といふがあります。人事を盡して敗れた後のすつきりとすが／＼しい三成の心境を察して唄つたものと思ひます。世の人は餘りにも成敗の結果を見て人を評し過ぎます。(中略)三成の如き人の業績と心境が頗る心ひかれます。此の意味に於て、三成の如き誤解されたる人物の眞面目を顯彰致されました貴著に對し深き感銘を禁じ得ないものであります(下略)

經濟學博士
京大教授 黒 正 殿氏

(前略) 過日は御初めての歴史的御論著たる「石田三成」御惠與下され難有存候。早速一氣に拜讀仕候最近最も面白く讀了せる著作、お手並敬服仕り候。(下略)

文學博士
東大教授 吉 田 熊 次氏

(前略) 御著「概説石田三成」(中略)昨夜早速開卷致し候處非常に面白く、遂に今朝までに一通り見了り申候。讀物としても稀なる面白さを感じられ候のみならず史實に關しても大に啓發せられ、三成觀が一變致し候。私共も「地震加藤」などを見て「加藤ファン」になり切り居候ためか、三成については何とは

なしに好感を持ち得ずに居り候處御高著に依りて大いに訂正の要を感じ申候。(下略)

四

池崎先生の「石田三成」を読む

經濟學博士 菅野 和 太郎氏
大阪商大教授

世には傳説口碑によつて後世の人を誤らしめて居る事柄は決して少くないのであるが、併し石田三成程後世の人々をし、誤解せしめたことは恐らく我國の歴史的人物上に其の例を見ないであらう。即ち石田三成は佞奸其者の人間であるとせられ、從來世人が三成を以て佞者の典型的なものと考へて居たことは蓋し何人と雖も之を否定することを得ないであらう。然るに今回池崎先生によつて史實が闡明せられ、世人を啓蒙したことは誠に近來にない痛快事であると思ふ。不出世の大英雄豊臣秀吉によりて見出された三成が尋常一様の人物でなかつたことは蓋し絮説する迄もなく、又彼一人が豊臣家の恩顧を忘れずして孤忠を守つた人物である。と言ふことも出来よう。他の多くの豊臣家臣は時局に便乗し、權勢に媚びて、己れの榮達を圖つたと言つても過言でなく、其の點のみより觀賞しても、三成程の誠忠の臣は史上に於ても稀有の事に屬すると言ふべきである。兎に角三百年間世人を誤らしめて居たことが、池崎先生の著作によつて其の非を知ることが出来たことに對し、吾々は池崎先生に深甚の敬意を拂ふべきであらう。

(前略) 今回先生の快著概説石田三成(再版)を

數日前店頭に見、直ちに購入、一氣に讀了仕り候。迂生かねて石田治部少輔に對して大いに同情を抱き從來の史家の不見識を憤り居候事乍失禮先生同様に有之候。(中略) 今度先生の該書を拜讀し、立證該博、議論正鶴、一瞬にして溜飲を下げ申候。(中略) 勝手な事を長々と認め恐縮に候へども感激の餘りこの一書を呈上仕り候。(東京 林泉氏)

(前略) 陳者玉著石田三成昨夜拜見仕候。然かして句々秀拔御卓見全編章を一貫する烈々たる御氣魄に俱々感銘仕次第に御座候。素より卷頭御挨拶の價値ある批評等は世の識者を俟可く只小生は小生の年來抱懷せる三成觀が斯くも鮮明に明確に

更に幾十倍の精緻と雄大を以て廣く天下に問はるの尊臺の雄健なる御精神に對し驚異と尊敬を呈表仕る次第に御座候。(下略)(福井 上崎雄氏)

(廣島 石田清次郎氏)

一氣呵成に讀破した。それ程人間三成は自分の心を捉へた。理論に走らず且自由確實に記されてあり實にさつぱりした氣分に浸る銘記すべき良書なり。(千葉 松本英司氏)

眞實な石田三成の姿を知りたいと永年求めてゐた望みは書店の數ある中より本書を見出し得て虎の如くに讀み終り思はず、ア、世に出た！と叫んで我にかへつた時、私の眼は涙で一ぱいであ

五

つた。(東舞鶴 福井重内氏)

我意を得たり。今少しく家康の狡猾老獪をこき下す要あり。(宇治山田 長江高一氏)

私は女學校時代から石田三成崇拜者でありました。今度顯彰碑が建つたといふことをききまして、これをどりして喜んでゐたところでございます。それでこの本は大變嬉しく何回讀み返してもあきません。著者に心から感謝して居ります。

(大阪 上野ナツ子氏)

眞なる偉人を眞なる言葉で表すは世が偉大なる歴史を創造せんとしつゝあるときであるの感強し。(京都 龜井 功氏)

讀みだすと終まで讀まないでは居られない興味深々。學者(御用)の陳腐な或は曲學阿世論と同

日に語られぬ、誰が讀んでも尤もと思はれる自由にして且公平な史眼に驚倒し又敬服した。

(大阪 石原末雄氏)

三成公刑死當時を追想致しまして公ならぬ小生も悲憤の涙にくれました一度墓參致したいと思ひます。(神戸 山口 上氏)

石田三成を讀み從來の三成觀を大いに反省する所あり。名著と云ふ可し。(東京 田中仙樵氏)

近江國出身にて石田三成公の治跡に育ちし小生本書に指摘されたる徳川御用史家の誤てる偽作歴史の數々を大變痛快に又有意義に拜見しました。

(滿洲 安田 實氏)

徳川御用で物足りぬものばかりの中に本書があるのは愉快だ。(岡山 梅本氏人氏)

小生年來の希望が充されたる感じいたし候。

(京都 谷口海山氏)

我輩が石田三成について抱いてゐる心持が遺憾なく代表されたやうに思ふ。一讀溜飲が下つたことを感謝する。良書である。(東京 東清次郎氏) 著者の個性意識が溢れてゐる仲々面白く拜見した。自分も三成は好きだから同感された處もある。(北海道 室田芳太郎氏)

從來石田三成は佞奸の臣として信じて居ましたが、本書によつていささかその三成觀の認識を變へました。(東京 青山雄太郎氏)

小生儀在燕、政治を研究致し居り候故甚だ得る處多く有之候。(北京 間島氏)

縣廳の某事務官より一讀を奨められて讀み從來

の石田三成觀を改め得た。(千葉 森田勝彦氏)

昔から今まで石田三成は世間から誤解されて居て正しく三成について書かれた本の少ないことを残念に思つて居ましたが、此度池崎先生の石田三成を讀んで嬉しくて感謝に堪へません。(東京 成毛鈴子氏)

非常に面白く有益に感じました。(愛知 齋藤 格氏)

結構な本です面白さに一氣に讀了しました。文名のにぎやかな作家のものより、かゝる篤學の士の勞作を逐次刊行され度い。(東京 竹森公男氏)

會員番號一〇五五〇六號

昭和十八年六月十五日初版
昭和十八年六月二十日初版
印刷發行

〔三〇〇〇部〕

田文協承認
430040號

納
復
契

●定價 貳圓
計 特別行爲稅相當額十九錢
貳圓十九錢

譯者

池崎忠孝

發行者

岡村祐之

印刷者

庄司万治

印刷所

庄司印刷所

發行所

會社 岡倉書房

東京市神田區淡路町二丁目七番地
電話掛出 二〇一〇二〇一
掛替 東京 二五九三五番

配給元 日本出版配給株式會社

池崎忠孝著 史學叢書

概説 石田三成

B 6 判 一九六頁
賣價一・五四—一五

三版出來
悲運の俊傑三成を如上に、史書の歪傳を是正すべく、公の治蹟を餘すなく究明し傍證した著者最初の史傳書。

聖德太子讚

A 5 判 上製 函入
賣價二・一九—一五

在來の「太子傳」が多分にもつて居た傳説的傾向の欠陥を衝き、如何に太子が眞に冠絶した爲政者であり文化人であつたかを著者は獨特の史眼を以てこゝに闡明し仰讚した。

近刊

執權時宗
隨筆醫學天正記
北條泰時

A 5 判 五百頁 (豫定)
全三卷
執筆中

959
125

終